

何か月も閉じこもってクロード・シモンの伝記執筆を終えた今、まるで書くことを課せられたかのようなこの完全なる挑戦——それはたしかに、まさにこんな風に、突然「やらなければ」という明白な思いに駆られたのだ——を本書の冒頭に別の言葉で表すとしたら、感謝という言葉しかない。

まず、文学のみならず人生の素晴らしい教訓である彼の作品に対して。つまり文章という肉体と言葉の極度の緊張感が、一行ごとに必要十分に込められた、哲学的なエッセーにもはるかに増して、生と死について学ぶことを探求した作品への感謝である。

また、類まれな人物であった作家への感謝であり、クロードが筆者に示してくれた友情はいつも恩恵のごとく感じられた。

そして最後に、寛大にも筆者に信頼を寄せて、彼女自身の記したものも含むすべての個人アーカイブへのアクセスを認めてくれたレア・シモンへの感謝である。おかげで私は直接アーカイブにあたる機会に恵まれた。とりわけ証言者どもはや存在し

ないような場合には、なおのことありがたく思った。レアがいなければ、これほどの伝記に取り掛かることは、まず考えられなかっただろう。

私は、晩年十六年間のクロード・シモンを知っている。信頼関係は確固たるもので、彼の作品の解釈においても私たちは意見をともした。

だからと言って、伝記の中で私は、この友情を濫用しないよう留意した。しかしまた、それについて触れないままであることもしなかった。伝記作家は、自らの存在を消し去らなければならぬ。大切なのは作品に寄り添うことで得られる感覚であり、事実だと証言する証言者——それは人間に限らず、資料であったり、場所であったり、オブジェであり、原稿であるが——に耳を傾け、聞き取り、解釈し、つなぎ合わせることできたのは、この感覚による。

私は多くの人々の、なくてはならない助けに支えられて時間を遡っていったのだが、とりわけジャンヌ・ガイヨ、マリールアン・サンス、アマデウ・クイトやジャン・マテイオ、フロランス・コデールブルゴワンに多くを負っている。彼らは生前の作家の最も古い時代に光を当て、その都度主題の核心を照らしてくれた。コレージュ・スタニスラス校(パリでも有数のコレージュが通った)に保管されたアーカイブに対してヴァイオレット・ポテイロが払ってくれた細やかな配慮があったからこそ、往年のクロードにより確実に近づくことができた。

これから始まる伝記のなかで、筆者はクロード・シモンという偉大な作家に対して、また二十世紀を駆け抜けた見本ともなる苦悩に満ちた彼の人生の軌跡に対して、自ら抱いた称賛の念を隠してはいない。しかし、これは美化された聖人伝ではない。しだいに積み重なっていった細部から、徐々に明らかとなっていく人物像に、おそらく私はあまりにもとり憑かれてしまっていたので、執筆中は片時も離れることができず、航海誌のような執筆記録さえもつけてこなかった。書き進めるなかで生

まれた考えが執筆を思わぬ方向へと導きながら、ページからページへと注がれていった。

推敲を重ね、試行錯誤を経て原稿を補完した。

伝記を書くということは奇妙な行為であり終わりが無い。それはまるで秘密に触れる——クロード・シモンは格別謎の多い人物であった——ようなものである。決まりきった規則などない。思うに、秘密の部屋にこもり、手探りで、語彙の機転に頼りながら、実証と想像力の間で、慎重でありかつ直感も大切にしながら作業を進め、言葉とイメージが思考を凌駕するに至るようであればならない。

最大限に忠実であろうとするならば、それはおそらく、彼自身がそうであったように、このクロード・シモンの伝記を、どこまでも命あるものの側に寄り添わせるといふことなのである。

ミレイユ・カルグリュベール